

時にもデザインの学習にも役立つ混色の基礎知識です。十二色相環は、ドイツの総合造形学校バツハウスの教師、ヨハネス・イッテが学生に色彩の基礎知識をわかりやすく教えるために九十年ほど前に工夫したのですが、いまでも色の学習に役立ちます。

「鉛筆で描いた下絵はよかったのに色を塗ると失敗をよくした」という学生も、この三原色だけで千色も一万色も自分で作ることを理解して、絵を描くのが楽しくなったそうです。

二・身近なところに絵本の種を見つける

わたしのすきなもの

「幼児の造形表現」の授業は、幼稚園教諭や保育士の免許を取得したい学生や、幼児教育や絵本に関心をもっている学生が受講します。毎年、一月から二月にかけて学生たちは自分たちで作った絵本を多くの人に見ていただくために、構内にある教育資料館で『みんなの手作り絵本展』を企画運営します。教育実習に行く前の学生が多く、地域の人たちや子どもたちに簡単な絵本作りを伝える工夫をします。

手作り絵本展の会場で、誰でも自由に参加して手作り絵本を作る時に、初対



『わたしの家族』 父・母・犬・わたし・弟

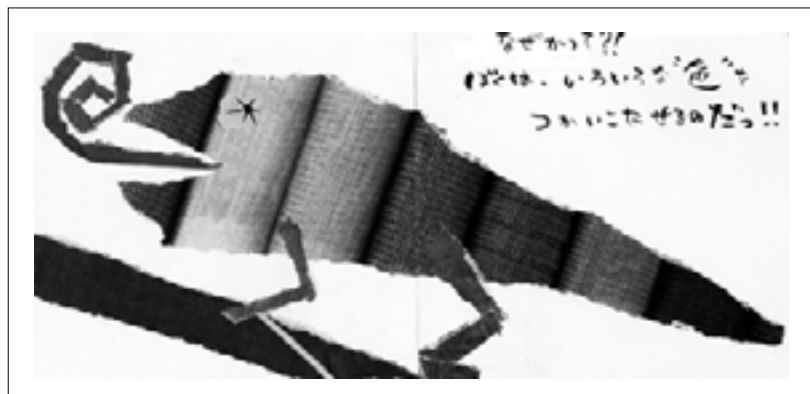
面の学生と子どもが「好きな食べものは?」「好きな動物は?」と話し合うと穏やかな雰囲気になります(口絵「わたしのすきなもの」五ページ参照)。

絵本の種は身近なところにいくだけでもあります。新聞カラーページを好きなくだものかたちに手でちぎり、画用紙に糊づけすると、絵本作りの第一歩を踏み出すことになります。ハサミでちちんとかたちを切り抜くよりも、少々歪んでいてもいいので手でちぎるとあたたかい感じがします。幼い子どもからお年寄りの方まで「わたしのすきなもの」というテーマは絵本作りに取り組むきっかけになります。

少なくとも四種類のを貼り絵にします。この時注意するのは、一枚の画用紙にたくさんものをいっぺんに貼りません。一枚だけの絵を見るのではなく、絵本はページをめくってつぎに何が描かれているのか想像する楽しさがあるからです。

わたしの家族

人間の絵を描くのはたいへんむずかしい。いつも見ているのでつい、似ている。似ていない、手足のバランスが悪いなど、欠点ばかり気になってうまく描くことができにくいからです。そこで、背が高い・低い、太っている・痩せているなどを比べて楕円形のちぎり絵で家族をあらわすと楽しくなります。家族ひとりひとりの



『わたしを動物にたとえたら…』

癖や特徴を簡単な文章でページの余白にそえるとこれも絵本になります。

もう少し具体的に人物らしくあらわしたい時は、頭、胴、手、足の各部分をばらばらにちぎって貼り合わせると、全身がバランスよく表現できます。低学年の子どもが学ぶ「紙版画」の技法と似ています。とくに手と足は関節部分で曲げると動きをあらわすことができます。

わたしを動物にたとえたら・・・

三回生の学生が愛媛県の小学校(母校)で教育実習をしました。その時、指導してくださった六年生担任の先生と実習生と一緒に考え出した教材が『わたしを動物にたとえたら…』という絵本です。「四時間で小学校六年生が絵を描き製本して作り終える」という条件で取り組みました。

一枚にあまり凝った表現をすると時間が足りなくなります。そこで素材は新聞のカラーページ・マーカー・色鉛筆を用意しました。絵本の構成は子どもに自由に任せるのではなく、つぎのように指定しました。

第一場面 自分をたとえる動物

第二場面 なぜ自分がその動物なのかの理由

第三場面 その動物を通して自分へのメッセージ

三場面だけの絵本ですが、ハードカバーの表紙(表紙は時間の都合で

実習生が用意しました)をつけると、本屋さんで売っているようなすてきな絵本になりました。

六年生の子どもは「なんでもあきらめ、尻尾を切って逃げるとかけ」、「肉食が大好きだから恐竜」、「力が強く目つきが悪いからライオン」など自分の特徴を見つけて絵本作りに取り組みました。

このテーマは子どもだけでなく、地域の人たちにも学生たちにも好評で、それぞれ自分を見つめておもしろい絵本を作ることができました。

三・一枚の紙から絵本を作る

一枚の紙を折って切る方法

新学期になり新しい友だちと出会う時に、自分の特徴を絵と短い文章で自己紹介する絵本があれば和やかに会話が弾みます。十五分ほどあれば作ることができず。

まず、A3用紙をひとりに一枚ずつ渡します。それを机の上に横長に置き、四隅を合わせて二分の一の長方形に折ります。これをさらに左右から畳み込んで、四つの小さな長方形に折ります。

一度開いて八つの長方形ができていることを確かめます。右端、左端の長方形